

刊行にあたって

2026年7月、国際大学GLOCOMは創立35周年を迎えた。1991年の設立以来、GLOCOMは情報社会の先進・先端に立ち、その進化に寄与すべく研究と実践の両輪で活動が続けてきた。本号は、節目を記念する特別号として、現在GLOCOMに所属している研究員らによる活動をテキストとして表出し、2026年時点のGLOCOMを記録するとともに、新たな展開を切り拓くための一冊として編んでいる。

タイトルに掲げた「ポリログ (polylogue)」は、複数の声が交差し、応答し合うことで新たな意味を生み出す対話の形式を意味する。独り語り (モノログ) でも、二者間の対話 (ダイアログ) でもない、多様で多声的な議論——それは、GLOCOMが35年にわたって役割としてきた『智場』 (intelplace) の在り方そのものでもある。

『智場』の創刊号は、1995年12月1日に発行された。第2代GLOCOM所長の公文俊平は、その誌面で次のように述べている。

『智場』(Intel-place) とは「知識や意見の交換と流通の場」を指しています。これまでの産業文明においては、「市場」(Market Place) が財・物やサービスの交換と流通の場として重要な役割を果たしてきましたが、来るべき情報文明においては智場が登場し、資本主義文明における市場と同様な地位を獲得すると同時に、未来の市場にとって、インフラとしての役割をはたすだろうというのが、私どもの持論です」(原文ママ)

それから30年余りの時を経た現在、高度化した情報社会における「知識や意見の交換と流通」は複雑化し、より多様化している。多数解が存在する社会において、ポリログすなわち多様な価値観や立場からの議論を支えることもまた、変わらぬ智場の、そしてGLOCOMの役割である。

GLOCOMという組織は、専任・併任・客員研究員とフェローを含む総勢169名(2026年6月現在)と、Executive Research Program (ERP) 会員企業から構成される研究プラットフォームという形態をとっている。所属する者は産官学民の異なるセクターでの活動から得た知識や意見を交換しあい、論点の集約と共有を図り、議論の成果を各自のフィールドで実装している。

副題に挙げた「AI」「ガバナンス」「智の実装」という三つのキーワードは、現在のGLOCOMを飛び交うさまざまな論点を集約し、カテゴライズしたうえで、簡潔にラベリングを試みたものである。

「AI」は2020年代を象徴するキーワードとなっている。GLOCOMでも、生成AIの登場以降、その利活用と効果、あるいはそこに生じる課題についての調査研究や政策的議論の場の提供、六本木会議オンラインをはじめとする各種セミナーを通じた一般への情報共有など、AIに関わるテーマが新たな中核となっている。利便性と依存、期待と脅威が同時進行するこの状況をいかに読み解き、方向性を示すの

かが、GLOCOMに問われている新たな責務である。

二つ目のキーワードは「ガバナンス」である。これまでにGLOCOMが寄与してきたインターネットガバナンスをめぐる議論、そして現在のAIガバナンスをめぐる議論には共通点がある。民間企業、各国政府や国際機関、大学・研究機関、市民社会、そして技術コミュニティなどの多様な主体が参加し、公共的な課題の解決に向けて意思決定、資源配分、実施、調整、監視などを行う制度的・相互作用的な仕組みの構築である。マルチステークホルダーの参加に基づいたオープンな議論をより一層加速していけるのか。これまでのGLOCOMでの議論を継承しつつ、今後もグローバルなガバナンスに関わる議論の場として機能していきたいという意志を込めている。

そして最後のキーワードは「智の実装」である。GLOCOMという組織の特徴は「研究と実践の両輪」にある。産官学連携の推進をはじめ、学術研究機関の現代的役割は、研究成果を社会、経済、そして政策立案へと還元し、さらにそのインパクトを評価することまでが含まれている。その意味において、GLOCOMはその先駆けとして社会に寄与してきたと言えるだろう。今後もこれを継承し、組織の在り方としても進化させていきたいと考えている。

さて、本号の構成をここで紹介しておきたい。巻頭インタビューは、GLOCOM客員教授に就任したオードリ・タン氏を迎え、AI時代の民主主義と市民、そして日本の針路について、松山良一所長・渡辺智暁研究部長が問いを投げかけた。タン氏からは、民主主義を「社会的テクノロジー」として捉え直し、ブロードリスニングによってアップグレードするというビジョン、それを実現するためのシビック・マッ

スル（市民の筋肉）をAI抜きで鍛える必要性、そして日本が世界の「ステアリングホイール」を担うことへの提言をいただいた。

第1部の「情報社会の思想・制度・ビジョンをひらく」は、2026年6月現在、GLOCOMに専任研究員として所属する7名が、それぞれの専門分野を起点に、情報社会の現在の論点を提示し、これからの研究と実践を提案する論考セクションである。デジタル・モビリティと格差、生成AI時代の文書管理とガバナンス、教育情報化のレビュー、情報の民主化と公共空間、生成AIと情報環境の変容、社会教育のこれから、そして社会変革のための場の設計といった各自のテーマにおける研究と実践の成果を考察し、今後の活動に向けた読者への提案を含む内容となっている。

インターネットガバナンスをテーマとした座談会では、長年にわたりGLOCOMの研究ネットワークの一員であり、同領域において国内外で活躍してきた論者の皆様に、現在に至るまでの歩みを振り返りながら、マルチステークホルダープロセスの行方を議論していただいた。

第2部は「研究プラットフォームとしてのGLOCOM」と題した併任・客員研究員による論考セクションである。地域と越境、ジェンダーとメディア、文化人類学とイノベーション、情報社会論の知的系譜、人間中心のAI、デジタル政策の課題といった多角的な視座からの問いが提示されている。フレッシュで社会的関心の高いテーマに取り組まれている研究者、そして長年にわたりGLOCOMを支えてこられた皆様に執筆いただき実現した成果となっている。

巻末には、活動開始から2026年で10年目となるGLOCOM六本木会議を支えてこられた方々を招き、情報通信政策の課題と展望をテーマとして行った鼎談内容を収めた。産官学民で情報通信技術にまつ

わる旬なトピックスを紹介しながら議論し、政策提言活動を行ってきた同活動への、そして今後のGLOCOMに向けた期待を語っていただいた。

なお、本来はより多くの研究員の皆様に寄稿をお願いしたかったが、紙幅の都合により次号に委ねることとした。ご理解いただければ幸いである。

最後に、本号の表紙デザインは、35年にわたる智の蓄積と、現在、そしてこれからのGLOCOMにおいて、多様な人々とともに織りなされるポリログが、じつくりと、確実に展開していく未来像を抽象的なテキストで表現したものとなっている。

これまでGLOCOMを支えてこられた皆様に改めて感謝と敬意を表しつつ、本号がその未来像の実現に向けた新たな出発点となることを願っている。

2026年7月

責任編集 伊藤将人・小林奈穂



GLOCOMウェブサイトにて、全文ダウンロードいただけます。

印刷版は、Amazon.co.jpにてご購入いただけます。



<https://www.glocom.ac.jp/publicity/chijo/11795>

智場 #125

情報社会研究のポリログ — AI、ガバナンス、智の実装

責任編集	伊藤 将人、小林 奈穂
監修	砂田 薫
編集・制作進行	武田 友希
発行人	松山 良一
発行日	2026年7月9日
発行所	国際大学グローバル・コミュニケーション・センター (GLOCOM) 〒106-0032 東京都港区六本木6-15-21 ハークス六本木ビル 2F URL https://www.glocom.ac.jp/ TEL 03-5411-6677 E-mail inquiry-glocom@glocom.ac.jp
印刷・製本	株式会社 紙藤原
校閲・校正	濱田 美智子
表紙・装丁	株式会社 コンセント

『智場』は、国際大学グローバル・コミュニケーション・センター (GLOCOM) が発行している機関誌です。

「智場」は、「知識や意見の交換と流通の場」を意味する言葉です。

1995年に創刊され、情報社会学のフロンティアに挑み続けています。

©Center for Global Communications, International University of Japan, 2026.